南總里見八犬傳 第九輯 三十三

特
イ曽4
600
274

600
274

曲亭老翁編演　全九十一冊一大奇書

○本輯卷三十三至卷三十五分卷又爲五冊

南總里見八犬傳第九輯下套下乙號中

○第百五十四回迨第百六十一回是編八則

玉蘭齋貞秀畫　江戸書林文溪堂精刊

南總里見八犬傳第九輯卷之三十三簡端附録作者憾自評

稗官野史の言風を捕り影を逐ふ架空根何ぞ世の人ふ稗益あん其要ハ只春の日ふ獨坐の睡魔を破るべく秋の夕ふ寂寥の欝鬱陶を醫ふ足るのミ是をも漢土ふ齊諧異苑の二書あり。國朝ふ浦嶋子傳續浦嶋子傳あり便是和漢小說の鼻祖戲墨の嚆矢とのいひべ。是より以降彼も我も其才ふ匠ーるぞ。宇都保源氏物語の艶ふて且花ヨヌ爲ふ水滸西遊記の奇くて且巧る其文絶妙句句錦繡寔ふ是稗史の大筆。和文の師表ろるめるる只其足ざる所をのづ源語ハ事皆淫姪ふ過て反て勸懲ふ詳ろぞ。水滸ハ勸懲隱微ふて。よく是を悟る者ふ。ちと見ハ强人の義俠ふ過ぎて是も亦惜ひべ。其大枝を知るも知ざるも又善讀ふ堪るも。讀ふ堪ざるも南倍氏戲墨を事とせる已ゞ如ぢ曲学者流ハ皆其頻章ふ倣まく欲て糟を舐り垢脂を拈る和漢今昔幾人ぞ其才あるハ骨を換胎を奪ふ傑

出る大筆殆世ふ罕ゆヨヌろふい其骨を掴ぎ胎を奪そ囫圇呑れば似て非る
る者武を接ぐ今ふ至て衰へぎ益其筆の遠祖偽へて稗史物の本ふ聖る所
以ふあらぎとせや抑古昔ハ文人才子の稗史物の本を作り設るふ必古人の姓名を
借用して胡意其事を異ふ壁言ば源氏物語の光君竹採物語の赫姫昔赫
ふ美女三人あり。詳ふ吾放言ふ載る。見べし。水滸傳の宋江等三十六人及彼晁蓋高俅等西遊記の三藏
法師曲曲ふふまでもるー足ざる者い意匠ゆて作り設て要ふ充つ未生の人も亦ヨヌ
ろ水滸傳ゆ地誌七十二人西遊記ゆ孫悟空褚悟能沙悟淨及諸魔君の如
ち毛挙るふ遑ふぎ又憶ふふ稗史い胡意其歳月を具ふせぎ是將作者の用心
ゆく正史と同ーかるざるを示ま然ば本傳ふ名を出ぎー北條長氏のゆるどを思べー彼
長氏の伊豆ゆ起りて小田原ゆ大森実頼を伐走らして其城ふ據りい明應二
年の事ゆて本傳ふ所云文明十五年ゆ一元十二箇年後を然るを本傳ふ當時の

事とも況安房の里見氏の山内扇谷の両管領と兵を構ー事るどもあるべもあ
かゆ事猶ヨヌろ。ふ本傳の正史ふ合ふ処ふゆらを作り設ー條ふ年號を為ゆ
本意ふ違ふ似れども只看官の與ふ某の事ふ某の年ゆと某の年ゆと意識の
栞ふ做ふー之然るを柱ふ膠せる者い虚實の間ふ遊ぶを知らぎ世を誣ひ俗を惑ぎそ
憎を論ゆ腐爛ふ庶ふ及べー毛鶴山ゆ琵琶記の評ふ其偽奇ゆ蔡邕伐評
あるふの蔡邕い後漢の蔡邕ふーて後漢の蔡邕ふあらぎ故のづゆ是別人とゆ
べーとゆひーい婦幼の疑ひを解くふ足る老実者の言ふ似ゆ只琵琶記の蔡邕のみる
ら西廂記ゆ燕鳥鶯鶯の類偽奇ゆヨヌくあるて古人の姓名を借用ゆ多者此間の能樂
降りて歌儛伎浄瑠璃本の如ー看官誰ゆ実事とせんや明の謝肇淛ゆ人
人稗史小説を見て其年紀事実の正史ふ合ざるあれば云云とふ者ゆかくの如ゆ
ふい正史を讀ふ不如其事の実ふ過ぎゆふい固巷の小児を悦ゆるのみ士君子ゆ為ふ道ふ

足らざるとハ宜ふ足庖言へ来らふ近屬雄飛録の作者其書の中ふ本傳の
実録と年紀合ざるを外めて甚しく誹りしを予い烏滸ふく思ひ〻のミ齒ふ揖る足
ざれが當時解嘲ふ及ざるしを今思ひ出ければ筆の次ふ聊ふ然れば上ふ解く如く本傳
る里見父子並ふ八犬氏てふ善士多るふ昔の里見氏ふて昔の里見氏多るを昔ありける
八犬士ふて昔ありける八犬士るるを且本傳の歳月も則昔の歳月を亦是昔の歳月
るるをのいでも多るを加ふ空ふ言畢竟遊戯三昧ふて高尾も世ふ裨益ふ這裨益ふ
を枝ふ幾春秋の意匠と倶ふヨヽく人工を費して老の至るを知ざるありけん本傳都て
百七十回杖ふるるふ筆ふらふ只旦莫春ふたくと幾遍物をかいふも思ひ難ヽ脚曳の
山鶏の尾のあらふ尾のあらふ貌ふる長物語い烏滸がまし。あの烏滸人の烏滸のあらふふ
あれども欲まるふい善を勧め悪を懲しふ世間ふ教るふを頑る女子童蒙翁媼
達の迷津の一筏ふもるれかしとその所為ふれば戯墨ふ筆を把り初ける吾少壮の昔よ

ふ樣ふて久ふらふる隨ふ六史九經女教女訓の貴を多ふども觸れを聖教賢論の
ふを夢ふざも知ふ婦女子の予が綴る物の本とのミ好て讀と年来ふる隨ふ稍
仁義八行の人身ふ在る道理をも不義隱慝の身を亡を所以をもおのづふ辨知
ア〻近隣ふ人の女の子輩ふ教るまでふらふを其教びを人伝ふ云云とふられしとふ
切てのをふしを本意ふ稱ふるふ世の諺ふ云鰯の頭も深信ふよれば多べ。然ば
是ふらの人の為ふ猶諄反して解くべ。大凡稗史物の本ふ古人の姓名を借用も
るふ上ふもふ〻ことるを〻昔の孝子順孫忠臣貞女を誣て悪人ふ作り易べるを其
善悪を轉倒せば縦新奇とふとへども勧懲ふ甚害あり。辟言び本傳る。金碗八
郎孝吉ハ故君の為ふ怨を復して且三君ふ仕へを自殺ふる義烈ふ士又山林房八を
身を殺して仁を為ふ義侠の良民へ倶ふ未生の人ふれども是ふを戮虐竊盜の大
悪人ふ作り易られハ予が甘ざる所ふ稗史伝奇の果敢ふも見る所ふ勧懲ふ

在り。勸懲正しからざれば、誨淫導慾の外も亦善人不幸にして悪人の惨毒に死辱を曝さるるども、作者宜く憚るべし。なほ勸懲に係れば、因て意ふ和漢今昔学ぶなる奇才子あり。未君子の大道を知らざるに、勸懲正しからんかは最難しともかくもべしの故に予常に遂ふ君子の大道を知らしめて勸懲正しからんかは最難しともかくもべしの故に予常に唐山史、大筆の稗史の作者は皆能学ぶて君子の大道を知ざるべし。尓るに其稗史中に淫奔猥褻の段間あれば見て悟らざる者は、作者時好に媚て這醜情を寫したりとのみ思へり。豈然らんや。其淫奔なる者は残刻忍兇悪の男女にして善人悪人の事なり。譬言は水滸伝に武大郎の妻潘金蓮が西門啓と奸通の醜態を寫去又楊雄の妻潘巧雲が裴如海と奸通の事あるが如し。這潘金蓮潘巧雲西門啓裴如海等は毒悪惨刻罪死を容ざる獍鴞虎狼の大悪人なり。這婦夫淫婦等が不義の淫慾に就りては、者官羨しく思へり。便是勸懲に係る所後の婦淫を

戒る作者の隱微と精しべし。是よりして冷山平燕を師として才子佳人の奇遇を作り設ける者、近日船来の小刻に特に好逑伝柳鶯轉の如き、偶畫にくもの孰も相似て時好に媚ざるに、わねども然しも其真情を寫して淫奔猥褻なる筆要せず。則是本傳なる信乃と濱路の情態を見て思へべし。其情態に好人と又人の差別あるべし。又本傳なる竜山縁連と船虫と竹林巽と於兎子の如し。皆是水滸に潘金蓮西門啓等を作り設てしく邪淫の戒に反るあり。心標に同じ況や美少年録なる陶朱之助が荒淫の甚しきを予が筆に似げるべしと看官思へ。予が本意に反らず那朱之助に後に陶晴賢と成登るべし。我逆の大悪人、他に少年なり。時淫奔なるを呈次て誰か晴賢ならんと願べし。是も亦勸懲に係るとあるを思へ。只善ゆもあり悪ゆもあり。忠貞仇の公子閨門の麗人及市井の男女の幽隙を鑽の相援に野合の淫樂の痴情を宗と寫す者は誨淫導慾なるべし。そもそも予が

せざる所ゝ昔孔子の詩を削るや猶淫哇の詞を遺して芟も盡さでやけるハ後ハ戒を無るゝ又心誅の文法をのそ春秋を作るゝ及びて乱臣賊子ハ怕れゝと云果敢る稗史物の本ゝも学問の餘力のそせる真の作者ハ心操を見るもありけり本傳ハ定正顕定成氏の如ハ皆暴悪暗愚の君るゝゆゑ酷く貶して作り做ゝあゝ看官評ゝく思ふもあるべゝ彼定正顕定ハ其ハ先世ハ主君持氏を殺ゝ且乱世の蔽ハ乘ゝて京都将軍の命令をのそ持氏の幼息春王安王を生拘り害ゝて且故君の職を横領あける不義逆悪の幾ひあり定正顕定ハ其児孫とゝて大職を義續父ゝ徳を脩めそ先世の罪を償まく欲せば屋成氏を攻伐走ゝて君臣順逆の義をえらばゞ剣扇谷定正ハ最後ハ仇の誣言を信容れて持資入道道灌を誅ゝ兵權ハ衰へて子孫凋落せざるとなしそのそ本傳ハ貶ゝて愚将とも又成氏の如ハ寃家の為ハ立られるゝ時務を知ゞ叨ハ害忠を誅ゝ鎌倉を追出され滸我ハ移りそ其城をも顕定ハ攻破られて千葉ハ寓居あれども仁義をのそ家を興さとを知ゞ先父持氏の弑逆ハ逢るハ乃祖尊氏の下剋上の餘殃ゝ悟らざりゝハ不賢ゝ人ゝのそ貶ゝ意衷ハ清の逸田叟が女仙外史ハ所謂春秋誅の筆ハ效ふとのゝハ烏滸がましけれども其の餘も本傳ハ原貶ゝ人ゝ知るべゝ又本傳ハ経文聖教を雑識ゝ人或ハ訐名めて物の本ハ原ゝ経文聖教を慢侮ゆゑ狹僻事をそ嗤ハ賢もあるゝ志と異ゝ本傳ハ新奇の小説ゝれども其仁義を説善悪を辨まるハ至りてハ虚実の二あるべゝもあらゞ四書五経を一言一句も学ばざる婦幼も本傳を愛讀序ハ啓筆て其経文聖語の尊ゝを知るゝありそ且感て且悟りそ学びの道ハ志を人もあれと思ひ侮るハ旦足老婆深切ゝく言儒経ハそゝ及びゝるゝ聖語を慢侮せも用捨ハ看官の随意るべゝ。

時　已爰の秋水月著作堂の南窓ハ静坐ゝて本傳の作者みづゝ評

文溪堂蔵

南總里見八犬傳第九輯下帙之下乙號中套編目録

卷之二十 二

第百五十四回　百中賣卜倡両將　風外風術招巽二

第百五十五回　豊俊得時請恩赦　妙真愁悲入軍役

卷之二十 四上

第百五十六回　貞行託與留穉子　毛野明察免死囚

第百五十七回　上總民孝義稟再恩　安房侯仁心定軍令

二十

第百五十八回　瀧田三使獻生拘

四下

第百五十八回　扇谷間諜導假使

卷之二十 五上

第百五十九回　助友忠誠代父志　信隆機變借族兵

第百六十回　衛士相桃両枝花　名將許容内應質

二十 五下

第百六十一回　重時逢異同両生　義任稟人先三勇

自是之下至第百七十回將結局云其八後板者五冊近日又復續出焉則全壁大團圓

南總里見八犬傳第九輯下帙之下乙號編中套目録終

賢童立里
巷貝宮莫佳人
安西就仏景重
人魚ゆきよ

武田左京亮信隆
たけださきのすけのぶたか
左ちゝみかたゝとさめく鳴る小田平
わさりの原のひとりさりき 熊田義嗣
磯崎増松
有親

○文奚堂蔵

小湊目堅宗
野狐香餌斃
何待犬牙傷
雕窩
東峰崩二春高
天品餅九郎

韓船貝六郎
みたちもせぬ文字のもるあやうと人
あらし山ほとゝきもをもの為ら落る
愚山人
朝時枝大郎
廉吉彫之

勁風盪艦
甘雨洗干
大石源左衛門尉
憲儀
仁田山晋六武佐

貌姑姫
たこひめ
うるあしの
池の面何有
みえし岡を
貌姑射の山と
箱ゑたりけん
著作堂
天津九三四郎員明
ホリ百次郎

自評餘論

或云近曽文人の好事る。江戸を東都と書て。是ゐ國字を施す。アツ

マノミヤコと讀せるあり。遮莫みやこい皇居の地をゐべし。武藏い古より皇

居の地ゐあらぬゐみやこと稱まるい。僻事ゑと云國学者流の辨論あり。そも

翁も知れるゐべし。然るを翁の作まる物の本毎ゐ東都曲亭云云と録すゝ。

ゐも僻事ゐあらぬもと詰まるゐコヲ答ていへらく。然ゝ皇居の地をみやこと稱

まるハみやこ所ろの畧省ゑ是ゐ都字を借用まるハ漢土ゆ天子の居る

所を都とゐへゞかれども。都の字義い猶ヨヌ〻ゐ正字通ゐ。天子所居

曰ゝ都。又十邑曰ゝ都。又邑都名相通周禮距國五百里爲

都。又總也聚也皆也歎美辭也凡言俱者曰ゝ都。又麗也

閑雅也。と注すゝ。学者の知る所ゐれば具ゐせを只い其要を摘むのミ。是ゐ

由てゐれを見れば。和漢其差あるあらゐ。都の和訓みやこのこゝろぞ。スベテとゐも用ひ

たゐ。もべてゐ則都會の義ゑ然ゝ東都と書てアツマノミヤコと讀まるゝ。僻事ゑと

ゐれけめ。已い東都を字音ゆ。則是をトウトと讀て東の都會とゐ義ゐ用ひ

ゐかゝいゐども唐山ゐ東都西京の稱呼あり。又天朝ゆ中葉より南樂を

南都とゝゐへゞ東都を字音の隨ゐ讀むとも。都をみやこの義ゑと思ざゐ者ゐ

らんや。然るを都會の都とまゐ思ハ牽强傅會ゑとゐ理論あらん。狹知ゐ。其

頭の論義い物ゐよゐべし。抑吾作れる物の本い皆是ゑ根の小説ゆ。面正

くもゐ技ゐれば作者の本貫を録まるゐ胡意江戸とゐぞて。則東都と稱ま

たゐ。ゐの故ゐ名號も曲亭主人と自稱すゝ。玄同顧鳥亦同とも云一二の雅號を

ゐく著さゞ予が別號のひとヨヌゐ。其ゞ中ゐ馬琴曲亭の二稱を始より

戲墨ゐのミ用ひまれる賤號ゑ名號ゐも亦ゐの心ゐ

んや。ある人ゑどて精せざりけるを予が編集玉同放言の餘も真面目なる隨筆ゆゑ。必姓名を見いて。則江門と録しゝ。敢請世間億兆の君子。物ふるゝて予が用意ゆゑの差別あるを思ふべし。吾少ゝ時。衍ゝ口ゆゑの一技ゆゑ西鶚されゝゝ名利の奴ゆゑ。ゆゑ。名の不可を今悔て及ばぎ既ゆゑて痛く老ゝ。大部かくの如き物の本を二ゝびい作りかゝらぶべく。かゝるのゆゑ。今ゆゑの或問徵らせば。後の人吾用意を悟ゝ。必論ゝるもあらんと思ふゝゝゆゑ自評と倶ゆゑ又ゆゑの編を附記して。ゝく後の識嘲を解まくを。多辯い德の害をとゝふ。文中子の為ゆゑ恥べし。

○前板（第九輯巻の二十九 百四十六回より巻の三十二第百五十三回まで。）五冊ゆゑ。亦校訂の遺漏あるべし。と思へば。今ゆゑの五冊を稿ゝ果るまで。前板ゝまゝ彫畫さぎ。才ゆゑ一三冊成を告ゝを。倉卒ゆゑ披閲ゆゑぬゆゑのゝ。何ゝ今再訂ゆゑ由あらん。ゝを又後板巻の三十六第百六十二回の簡端ゆゑ録ゝべし。

自評餘論終

南總里見八犬傳第九輯巻之三十三

東都　曲亭主人編次

第百五十四回

百中賣卜両將を倡ふ　風外風術異二を招く

先説五十子の城内ゆゑ既ゆゑて十一月も末二五日ゆゑゝ時候ゝ。約束の諸侯来會ゝと。士卒第二郭を充滿ゝ。そゞ中ゆゑ管領兵部大輔山内顕定ハ家臣齋藤兵衛佐高実ゆゑ。山内の館を守らせく。嫡男上杉五郎憲房と共ゆゑ。軍兵一萬餘騎を従へく。十二月朔日ゆゑ鎌倉を打立て。三日ゆゑ五十子ゆゑ来會を。相従ふ両大丈。白石城介重勝。小幡木工頭東良。隊兵谷千五百餘騎共ゆゑ一萬三千餘騎。先六御河の上ゆゑ到て。定正と會盟あり。其事畢て。五十子の城へ迎ゝ。三隊の軍兵を入るゆゑ堪ぎ。尚大森ゆゑ陣をゝ。這他足利左兵衛督成氏二千餘騎。

千葉新介自胤一千餘騎長尾判官景春三千餘騎簸大刀自の代軍稲戸津
右衛門尉満胤大将扇谷修理大夫定正七千餘騎定正の庶長子式
部少輔朝寧一千餘騎嫡子五郎朝良千五百餘騎大石石見守憲重千三
百餘騎其子源左衛門尉憲儀五百餘騎又近国近郡の野武士们招ぎろふ集
来る。顕定定正の隊ふ附く者殊ふ多ヨヨかり日れい都て五六萬騎ょ及びと。偽
て十萬餘騎と唱ふ。内長尾景春い既ふ出陣の報ありとのへども。胡意中途ふ
淹留とそいまだ五十子の城ふ至らず。又許我の足利成氏い。初大石憲儀。扇大将ふ
仰んとの言の憑ゝく。且横堀在村ふ蔦ゆられて任く五十子の城ふ来會あるふ定正
顕定い敢成氏を敬ひ。動もまれば勢力ひふ乗ゝく。至礼る舉動勘くれい成氏のれを
情りてかの去ぬと思ども。又世の人の嘲謔の有數ふ影護けれい。獨安らぬ會を
押へて。默然として在り日る程ふ十二月二日ふ至りて。定正顕定諸将を集合て水陸の

軍評定ありけり。登時定正謀りていへく。我意ふ。今柴浦より。安房上總へを一葦
渡るべ。然い順風宜ぢ日ふヨりく大小の戰艦ふら乗ゝそ。一時ふ安房へ推渡らば。
て つぎ
ふ唖して義成を虜ふせんの易ふ。敵の士卒と分ん與ふ陸い下總る国
府臺弐い中川行徳津ふ一二の大将を遣して下總を畧。上總ふ到らば。我陸と水との
大兵相合ふく。敵の前後を防ぐふ由る。兎を脱ぐ鉾を倒して。皆降らんと願べ。この
説什麼と勢ひ猛くふ合る如く説示ま。顕定ぢく頭を掉く。其計好とい
ども。我大兵江を渡らば。敵も亦船ゝ浮めて逆へく防戰ふべ。且敵い海邊を家と
まれい。水戰ふ熟る者ゝ然ると況や。今い玄冬の真中そ。寒威壮る折ふ乗ゝ士
卒の脚亀りて。船の上の操ゝ必自由ふべ。と思ふい甚麼と難もれ。大石
憲重找ゝ出て。両侯の御宏論孰も是その理あり。然べそ江を渡さば。敵を一時ふ
亡しかるべ。と憚りふいへども。順風烈ゝ折ゝ待く。風上ふ火を放ちそ。敵を焼くふ

ちくとゝ。昔唐山三國の時。呉の周瑜ぐ。曹操の大軍を克けるも。只風と火の幣助ふ据れり。あの戈を思ー召れぞやとゝを顕定うちゆゝ。然之火攻のるゝーも我も亦始より思いざるふゝゝねども二八月の時候ゝゝば風烈ゝ日のヨゝゝゝ前月よりて今日までも。浦風暴ゝ日い稀之。倘幸ゝ三四日の内ゝ烈ゝゝ順風ありとても我火を放ゝ時ゝ及ひく。其風猛可ふ吹替ゝゝ反て射方の船を焼くべ。开も亦危ー殆ー。と論ーて果ゝくもあゝざれゝ。定正一雲時沈吟ーて大輔殿顕定の説論ゝ遠慮ゝ過ゝ。射方武運ゝ稱ゝゝ風も吹くゝ。替るべゝゝ。明日い柴浦へ立出て那地へ渡る遠近を地方の民ゝヨ尋問ゝ。必便宜とゝゝゝとあゝん。今ゝゝ狐疑まるとゝゝゝとゝを諸京一座の諸將。成氏自亂朝寧朝良憲房を首そ。白石重勝小幡東良大石憲重藤憲儀稲戸津衛由充まゝ。大家ゝの説ゝ従ひけり。偖而其次の日ゝ定正顕定ゝ大石憲儀白石重勝以下。士卒と。僅ゝ百名許を従へて。俱ゝ城を出馬を找ゝ。柴濱高

畷の浦邊より眺望ゝ。則浦人を召よせて。這里より安房上總へ渡るべゝ水路の遠近を問せゝ。浦人答て然ッゝ。ゝゝより上總の木更津まで水路十六里（三十六町一里）いべゝゝ便路ゝゝ。扁舟のて渡るとも一夜ゝゝて到るべ。他國せ前面ゝ高く峙立たるゝ安房の鋸山そゝ。那山の邊る海濱まで八九里のゝゝゝゝ。ゝゝれども横走る船ゝ特ゝ危ゝ者ゝれ。渡ゝ者いゝゝ洲崎ゝ猶右ゝ方りて。ゝゝより斜ゝゝゝ十餘里許もあるゝゝ欲他領ゝれ。漁網ゝも那浦近くゝ。這浦より船を寄せゝゝゝ詳ゝ知ゝゝけり。登時一個の遣ト氏ゝ。編笠深く戴ゝる身ゝ。涅染の太絹の故ゝる小袖を被て。朱鞘の一刀を腰ゝ跨ゝ。磯馴松の下ゝる。平品ゝ尻を掛て。小机の上ゝ易經と卦木と筮ゝ立ゝる筮竹ゝ。又紙ゝ捻り。裏銭二四ゝのゝ。相距ゝ遠ゝゝゝゝ。今浦人のゝゝの眞ゝ。忽地高く咬ゝ。當卦本卦吉凶悔吝方位宅相勝敗利害我占妙々百筮百中。問せゝゝゝ。ゝゝ聲ゝ定正驚ゝ見ゝゝ。顕

八犬傳九輯卷之五
十二
高暇ゑ両骨
領水路と浦
人ゑ向ーむ

八犬傳九輯卷之五
十三

定めぶ。人疑ふ。必惑へり。其疑ひを決し惑ひを解く為に周易の如とあり。
べし。折から那里に賣卜児あり。召て試ふ。顕定異議あるべく伴の近習に分
付て他を召とそ召ける。賣卜氏は何容る色あり。徐に編笠を脱捨るとこそ。
年尚二十に至らぬ。眉秀面白く。星眼高鼻。丹花の唇。齒は並べる瓠瓜。仁の像
く耳は厚く長くして。乃ち似るべけ。相貌堂々として。賤しからぬ。威風猛くして
侮りかたし。這個路傍の生活児。引れて定正顕定の馬前近く来て。跪く時。大石
憲儀。找を出て。やれ賣卜児。汝が姓名は何と生れる。這里に出ます。御大将。則
是関東の両管領。御坐ます。目今。女は山内の。尋ねる義あんを。詳に御
業。禀しねるべし。と宣ふ。賣卜氏答て。仰。義あり。人數ねど在
下に。品百中と。喚ぶ。浮浪人。生活の為に。比る。這頭に。旅宿しぬ。
易は好む。所。年来学得ぬ。何ぞ。判断仕らん。とぞ。定正。

東京堂蔵

乃て顕定と共に。馬を下り。発児に。椅て。百中に。向て。曰。其漢子。我今
爾が一筮を。買て。宿望成就を。欲す。と。請て。百中。毫
も。擬議せず。筮竹を。一変して。一変時。眼を閉て。神の内。卜占果て。莞然として。矢を。辨
ずるやう。卦面極めて。大吉。巽為風☴を。得て。巽は順。又入る。順。
討て。敵国に入るの義。あり。且其象は。則風。是を八方に配れば。則是辰巳。
又巽の字の形。なるや。巳。両箇並立て。共に。倣ふの義。あり。抑尊公。御両所。和睦合
體。すして。辰巳の方里。見氏を。討ん。謀りあり。所。巽の一卦に至れり。盡せり。且江を渡
て。水路より。安房に入るべく。欲す。則巽の辰巳。して。又入る。の義。稱ふ。知。又巽を
風とも。鬨。戰の時。臨む。順風起りて。御船を。扇ん。君子の徳。風。
加へ。草も。木も。皆靡くべ。偃んず。必。ともべ。何の。御疑ひ。と。言。詳に。説諭
せば。定正。の。疑ひ。解。亦百中に。向て。曰。判断既に。了。

なの壬辛ひかてよく當らば賞禄い必ずふる儘せん然りながら欲まる順風ありとくも其風烈しくふるれば謀る所かひなけん且其風い何時候吹くや吹らば必列從やと問へば百中然い辰の數い五へ巳の數い即四ろ四五二十日待ざれいるくてそいるとられて顕定欲ぶ定正を召ろて和殿いいふ思ひゆる數萬の軍兵既ふ集合ふの卜並を空費して徒ふ日を過さば戰飯竭て叛く者あらん然るとたい労して功なく不便ふそと呟けば定正も亦樂まを俱ふ百中ふうち向ひやよ百中汝い易ふ劫をゆられば風を自由ふ召ぶ術いるやあらば千金も數しらぬ邦助ふうりねと慇懃ふ請て百中答るやう御諚餘議なくいへども在下い天地を動さまでの術者ふあらぬ師ふて風外道人ふ其法術ふ量あり鬼神を役し風を召び雲を起し雨を降す其劫其術古の役小角ふ伯仲ちり然りけれども道人い塵ふ交りて術を賣らぬ年来遯姑峯ふ山居しくひしふ偶這頭ふ隠遊び今い谷山ふ在ます師ふ就て順風を乞ゆるといいふて御本意の如くふるべきの説ふ儘しめんと云ふ皆便宜ヨアければ定正顕定欲ぶふ堪ぬ召ろば徑ふ其師を訪ん却何を齎ぬと問ふを百中ゆ為ぬ否師い寡欲ふるとりて紙一枚でも報いを受ぬ請る者あるとれ則沐浴斎戒して祭ざれば對面を饒されるとかり遽莫猛可の御登山ふれば御伴當ふ代垢離を嘗るせて那里へいそぐ其ふとりを両将敬び容て欣然として敢遅擬せぬ遽即伴の近習を召て若们い両三名今咱ちぬ名代ふ海ふ浸り潮垢離執て俱ふ深信祈請て迹より谷山へ来よと分付れば百中い退て易経並竹ふの餘の東西まで皆秋ふ裏て懐ふ持ち小机い脚を折枉て引提て来ふ程ふ雑兵代りて推ゆ中ふ悠而定正顕定ふ各馬ふうち乗りて白石重勝大石憲儀以下の伴の士卒ふ皆従へて赤岳百中を先ふ立ち早く谷山ふ来よければ百中則相敬きりて定正顕定ふ下馬ふて士卒ヨヨく登るを饒さぬ又只重勝と憲儀と両家の近習五六名を従せて俱ふ山ふ登る

程ふ常葉樹のヨメふ敷かり柱る。這山の半腹ふ上古の穴居の迹欣とおぼ紀一箇の横穴あり。その洞内ふ菰莚才ふ一枚布て端然と結跏趺坐をる一個の衰法師居り。形貌い瘦て千歳の松の如くふ脚い細て蟠る竹根ふ似る。髯い黒くぶ又白くぶ既ふ二毛と見るとの べ。頭髪も亦伸る身ふ故りる。單の浄衣と被く海松の像くふ破れ擬年る黒染の麻の裳法衣と纏ひ。眼と閉て合掌をる。開ぐ身邊ふ髑髏ふ灰を装て香爐ふ代ふ焼る抹香の煙靡ぶ中ぶ消つ起ゆ。當下赤品百中ハ且定正顕定主従を。樹下ふ立在せ。單洞の内ふ拠ふ向ひて跪紀て報る。師。師父我百中ぐ目今還りのとを風外ち空て。眼と睜紀領紀て百中欣爾るとて今日ぐろかつ来ることの早るやと問べ百中。然ンは奮ふ高畷ぶ憶りる。扇谷山内の両管領の為ふ一筭を布紀る折言師父の上ふ及びて憑る美ハ只得俱て参りふ其故い箇様々々。恁々ふひと。今番定正顕定和睦合體と異見を亡さまく欲まるふ。自家の大軍水路を渡て。敵を火攻ふ做ま。ふ其折自由ふ泊るぶ則烈紀順風ふ因く師父ふ風を求るとふ其望の趣を告れ。風外頭を掉て。そも又要ふ紀紹介ふ我術風を自由ふるぜども。人を害て土地を奪ふ其悪強人ふ異らぶ。然る殺伐を貪んやと。去ねらさまを。と叱るを百中推返て。仰理ふ。征伐闘戰い武の道ふ況他い逆ふ我い順ふ。則我順をりく。那逆を討紀ハ州是より平治て國民塗炭を免れん。枉て需を容れゆしと。口説けが定正顕定共侶ふ洞門ふ找と寄り揖て。道人咱るい是関東の両管領ふ。顧問へる。心の誠を照査ふ。願ひを恢へゆとか。と請求れい風外道人嘆曰氣て。是非ふ及ぶ。我その風を起て。欲まる方ハ西欣東欣本月幾日ふ江を渡ま。と問れて定正答るふ。風い乾を順風とぶ烈紀を願へども酷く猛烈るぶ。自家の船を覆ま。然ぶ疾くぶ緩くぶ。程く吹て変るとる。始終乾を大利と

もとへ顕定も亦公方諸方の軍兵催促に従ざる者あるとうければ咸五十子に充満ちつゝ速く出陣せまく欲む四五日の内に吉日あるべと問へば風外指を折て今日は十二月四日より今より二十四日の後八日は黄道大吉日乾より巽に入て事を計るに大利あり本月八日の辰牌より端に乾風を起して当晩亥中に至りて休むべしとぞうそは猶疑ふ心許なく思れん先や試に我本事を示さんぞ這方へ来ませと身を起して洞門より立出て山の頂に攀登れば定正顕定以下の毎重勝憲儀両家の伴当百中と共侶に相従ふて徙りけり登時風外道人は立て隨に乾に朝ひく懐より細小なる錦の壷囊物を出して一雲妻時額に推当て眼を閉咒文を唱へて躾く件の壷囊物を食ふ直に招く程に怪むべ乾の方より疾風忽来て砂礫を颺げ樹を鳴らせば定正顕定伴当們まで吹倒されて石に推られ或は葛藤枯苔花に縋付て一雲時こそ在りけれ久しう堪へ兼て勢ひ衰ねば定正顕定聲共侶に向ふ道人本事は知り及ぶ風を歌ひ給よ納めよと叫ぶに風外然こと合点して更に又咒文を唱へて壷囊を懐に夾れば姑且て風歇て塵も動ぐ衰しゝ憲儀重勝以下の伴当まで駭て嘆て天を瞻ぶ定正顕定は共侶に更め塵を拂て謹く風外に朝ひて教を陳ぶ師は寔に神仙の既に奇風の帮助あれば敵を火攻の計成りて義成父子を虜にあらべく憎しと思ふ悪八犬士を暫く軍門に集んの手より四月の外を出べ凱旋の折又ふ拝見しく法恩の報ひをもとげれとを風外に乞ふ我は人の為に偶小術を施せども報ひを思ふ者はあらぬ然べ那風を起しぬ次の日ぞ又對面の折ふしんのみ只我弟子百中を權且両公に従せん他が親赤品某甲は伊豆の堀越の御所の旧臣なり兄は先君卒去の折伊勢新九郎長氏に襲れて城地を失ひぬ那身は則退隠して相模の夏武澤に居り夫婦

共に行績て既に是古人にるゝぬ其子百中孝順ゆく且奇才あり我其孤るを憐て
年来弟子にあて易を學ぶせしに既ゆく奥義をうる倘疑しるあらば必他に問
ゆくとの晤譚の間定正顕定い心ともるく共侶に漁の方を眺れば這辺濱る科
草より上總いちゝ安房まても斜に下ゝくゝよく見えけり當下顕定告ていはく師
父の教誨幸ひヨヌるに肝胆に銘して忘るへからず就て又教を受て惑ひを解まくほ
美あり鄙に高畷ゆく地方の浦人を召とゝ安房へ渡るべき水路の便宜を云云と
尋ゝに其答詳るゝ船ゆく安房へ赴くに何の浦に近るやと論えゝと請問ば
風外も亦海を眺めく現其説も要緊るべし安房い洲崎を第一の港口とも
稲村の城へ近けれゝるゝまて諸國の海船い都て洲崎に入ゝ所るゝ約水路の洲
崎へ近るゝ相模の三浦より纔に六里過ぎ相望むに其浦るゝ甘屋も松も數
ふべし然ば両公の戰艦い八日の曉に早く高畷の浦より漕出て三浦の方へ推

遣らし乾の順風起るに及び蒹葭直に洲崎へ寄せるべ勢い車戰に十倍しく防ぐ者るゝ所へ又安房の洲崎より尉ぐ崎へ水路八里その他富士い西と戌の間に見も邈姑峯も亦戌亥に見も又櫃嶋い戌の方假奈澤い亥子の方伊豆い西三浦い戌亥の方に當れり皆安房の洲崎より眺望の方位へ有慌れば相模の三浦より洲崎に船を寄せる時い乾をめて順風とも又大磯い戌の方雨降山一名大磯山も戌の方三崎い戌亥の方と知るべし然ば五十子の城より出て船ゆく里見と伐んとるゝ安房い迂遠ゆく水路反て近くゝ鹿山を目標ゆく上總の浦へ寄せるに倒に便路るきなれども徑に稲村の城を攻落さゝく欲りしゆゝ非如迂遠くとも我風濤の帮助あれば速に障りるゝ所へ必勿疑ふべし定正顕定いく感服しく
鈇びにべうもあらず俱に一唱三歎して思ひけり姑且て風外に又安房に方ど
ち眺めく啓よ百中と喚けて汝那を知りやといはく逆に指さ百中も亦ゆと

見て小子眼明るければ見る所ゆゑ教めと請問へば風外又指示を知るべし那よく他を見よ洲崎の方ゆ隱々る一道の黑氣あり是則那里ゆ反忠の者あり必両公の戰ひを資ん翌より二日の内より其吉左右を望くとあらん寔ゆ珍重珍重と祝まをうち望く定正顕定いく欺びよ堪ざれば憶ゆ至妙々々と稱へく意氣相共ゆ揚々うあれども風外の術ゆ誇れる氣色なく定正と顕定を相儆めく諭まをう両公の盛德高運都くかくの如くなれども天機の謹て漏もべくゆ今は言ハ戲れのみ叨ゆ人なる知せめとて今いまも時移らぬ猶長居あるべ士卒ゆ疑ふ者あらむとて還るべかとてそゞ立れば定正顕定寔ゆ然べと応ず俱ゆ別を告ぐ又ゆ師父の德義忘るべくゆ口ゆの儘ゆ相別れて再會を許されぬゆ特ゆ遺憾の至り但一百中のゆゑろ軍功あらば重く用ひん俸祿思ひの隨るべしとゆを風外ゆ少あゝゆ否と他も亦紈袴の為ゆ西覊されて勢利の奴となるを樂ゆ權且麾下ゆ隨ふ値遇の奇縁を果せるのことなり百中ゆゑろ向ひく小子らく勉めよ今番の聞戰合期して汝両侯の與ゆ微功あらば速ゆ辭し去く舊山ゆ還るべし古の人のゆゑらく一日除目を見れば三年道心を損ず是を慎め慎めと叮寧ゆ誡れば百中唯々と応じて身を起し先ゆ立く卒とそ下山をいそぐせば定正と顕定の則伴當を従へく徐ゆ山を下る程ゆ風外も亦後ゆ跟く洞の邊まで送りけり然ば憲儀重勝らるゆの餘ゆまで従ひ来る両家腹心の近習まで俱ゆ風外道人の奇風の術を目擊せし者都てそる信せざるなく恁る異人の資助あれば今番の征伐水陸共ゆ大勝大利疑ひなしと思へば漫ゆうち笑れて俱ゆあらぬ勇をける恁而定正顕定ハ山を下り馬ゆ跨く五十子の城へ還るゆ鄙ゆ代垢離執りける近習ゆあらは来て待く在り這餘の士卒も皆従ひて疵く五十子城へ還ゆと寔ゆ儘先有司を召ふせく赤品百中ゆ事恁々と早くあらを沿まれば有司則奉

谷山小風
外房總の
便路を指
敵も

猛可ゑ百中ゞ憩所を准備あゝタ饌中酒を薦めるゞも。小程ゑ定正顕定いの日在城の諸将ゑも赤岳百中ゞ事の顛末其師風外ゞ奇風の支ちゞ悄ゝゑ告知まれゞ大家感ゞ且歎ゞく憑ゝく思ゆゆる。左右まる程ゑ目の昔ゞけれゞ定正顕定同席ゑ宣憲重憲儀東良重勝ゞ四個の大夫をゝ侍ゑゞ那風外ゞ教ゑ据る。水戦の密議ゑ。則赤岳百中を這席へ召寄せく猶疑ゝゑゞ向試るゑ百中ゞく是を辨ゝく。意表ゑ出るゞ其言果く又百中ゞゑゑ。數るらねゞも。我素生を鄙ゑ師の告を亦ゑゝゞ隠さゞうもいるゞ。就く又一説ゞ。愚父ゞ故朋輩ゞゝ。其兵毎の子弟の武芸熟云男悍人ゑ勝れゝも。良主ゑ遇ゑゞ世を托て皆野武士ゑゞゝゞ。今も親の由縁ゞく。在下と刎頸の交り孰も切る兵毎甲乙ゞ慮百有餘名。邈姑峯ヨリ武澤の間ゑ居り。他ゞハ伊豆の海邊ゑ生育く。皆水戦ゑ熟ていゆゞ。在下両三日身の暇を賜りて。夜を昔ゑ接て

那地ゑ到りて。薦めく御方ゑ俱ゝく。水戦の時ゑ臨ゝく。必よく做ゝゑ千騎の勇士ゑ勝るべゝと。ゑを定正ゝゞ。少てそを西ゝゞ。既ゑ先陣の日ゞト定め。八日ゑ程もあゝゞ。其期ゑ合ん欲甚麼ゞゞと。向へゞ百中然ゝ在下那死友名ゞ伴ふて。徑ゑ相摸る。新井の城へ赴て。船三十艘借りゝて。必八日の閑戦ゑ先駈を仕ん。那里の城主三浦殿へゝく。其船毎ゑ柴焔硝。積入れて。百中ゑ渡ゞゝと。仰遣ゝゆゝか。と請ふを定正左右ゞく。饒さゞ。先顕定と商量て。且憲重憲儀重勝東良ゞゑ意見を向ふ四老臣ゑ別説ゞく。皆便宜のゆゝとゝゝけ。登時顕定ゑ百中ゑ向ひく。目今の一説宜ゑ宜。我軍兵ヨゝゝとゝゝども。水戦ゑ熟さゝゑ稀ゝ熟ゝ。ゑ汝們先鋒ゑ找まゞ。尤便宜とゝゝゝ。汝ゞ船を借まく欲る。新井ゞ我屬城ゞ。那里の城主三浦陸奥守義同父子ゑ世ゑ知れる勇士ゞく。水戦ゑ熟れゝ。必是ゞゞるべゝ。明日使者を

遣りく風く諜し合せぎとふを百中額衝況美く。ろうんゆい左右の事ふ御符節を賜ふべく御航幡を借させゆく符節るくゐ那里ゆく。疑るくゆもいつむ既ふ借りくる船ふ標識るくい何をりく。敵と御方を分別せんゐの美を願ひ奉ると請へば顕定點頭く。現脱落ゑ用心るゐ。新井の城へい豫より火急の軍事を辨せん為符節い既ふ遞與して有り泄ゆい今宵取せぎとのべ定正も亦ふゆう量裏ふ我諸方の軍兵を催促ある折ヨヌく大小の船を駈合せて水戦の所用ふ做ま。武藏下總の諸川ゆ思ふも似ぎ浅船い稀ゐり。水戦ゆゐ巨舫より快船をりく便利と考られば早く敵ふ合もうれ欠倍れば航幡ハヨヌく餘りあり。さぶれ新井の城ゆく借る船ゐ山内の航幡を用ゐ好とせん。或い又那家の航幡を借さんといつぐ左も右もせよと諭せば百中歎び美て然ば在下い明日の曉天ふ當城を立去く。遐姑峯路へいそぐゆう目今美りふ御意の如く。水戦ゆゐ巨舫より。浅船ゐ進退自由ゐれども。我師の奇風の帮助ふへば巨舫も亦走る。浅船ふ釣ゐく快るべく。且巨舫い勁風ふも亟復られば反て利あり。敵の合もうる其浅船ハ皆焼ゐゆぎいつむとふへば定正矢しげふ然也々々と頷ゐく。密説いゐふ果しゐゐ。顕定い白石重勝ふ今宵百中ふ遞與さぶ符節の事。航幡の事。及明日新井へ使者を立しく。義同ふ諜し合ゐる。百中ゲ事。恁々とぶろゐさぎろ命もさぶ定正も亦大石憲重憲儀ふ今宵百中ふ取せぶ他ゲ路費の事。又戦財帛を乞禀さぶ。ゆの美も有司ふ偽へよとふを百中推辭く要せぎ在下只身單ゆく二十里有餘の旅ゐふ路費を賜りても用る所るし況戦財帛るンどハ聊も望しかっぎ。只符節と御航幡を預らゐるべ事足りるん身の暇を賜るべし。とふふ定正顕定へ其廉直を感しく強ぎ憲重も憲儀も。又重勝も東良も。這賢才を沒ゆしより。実ふ幸甚しと稱ゐく疑ふ者

るりけり。恁而白石城仆重勝ハ百中を招く退ぞて。隨即符節と航幡を遞與ゑ〜ゑ。百中ゑれを受合ゆく。辭〜く憩所ゑ退ぞく。權且枕ゑ就く程ゑ既ゑ曉天ゑるり〜ゑ。熟睡も泡せぞ起出く。隷僕ゑ差めゆゑ。早飯を喫果く。遽〜く身裝し。符節を袂疑と懷ゑ夾め。又袱ゑ裹ミ〜ゑ。航幡を背ゑ駝ふく。則件の隷僕を。案内ゑ為つまゞ開ゆ城の角門より出ちく。烏夜ゑ乗〜くいそぐ程ゑ。先谷山ゑ赴ぞく。洞門より喚内ゑ風外ハ既ゑ起出く。落葉を集めく。焼て居り。今百中が來ゆるを見く。招ぞ入れく首尾を問ふゑ。百中ハ。昨宵定正顕定ゑ説薦めく。符節と航幡を授る事の顛末を。委々報知ゑれバ風外ハ少々頷ぞく。開ちゆとゆぞ梓ぞく我ハ再度の使もあらむ。その折まで在んと。一霎時密談ありける。這風外道人と百中ハ虚狡実狡。看官作者の分解るを俟べく。各猜〜く知れるべし。

第百五十回 豊俊時を得て恩赦を請ふ 妙眞愁愬して軍役ゑ入る

是より先ゑ大阪毛野胤智ハ。那夜丈〜、大法師と犬村大角を。悄地ゑ快船ゑうちの乗せく。武藏の柴濱へ遣しける詰朝單伴當を従へく。稲村の城へかゑ赴く。遣即義成主ゑ見参して。昨日大角と共侶ゑ、大法師ゑ説薦めく。件の僧俗を投を方〜遣しける事の首尾を詳ゑ申ゑ上げゝ。義成主欽びく。ゆゑれば那八百八人の徒ゑ計必是成るべしとて。毛野が奇才を感せる。當下毛野又亦ゑ臣ぞ。既ゑ計る所ハ。僥幸を願ふゑ。俠〜いまゞ必ゆゑ。何とゆゑれば大角則那地ゑ在て。責上とゆく。敵を倡ハ欺く時只那城内の毎ゑ便〜まく欲ゆるも。鬨戰の折まぞゑ。餘日ヨヲくいたゞ。那城兵ゑ親愛せる。便宜速ゑあるべしや。又竟ゑ遇ふ〜なく。事徒ゑ多くゆぞや。前より知るゆぞ所ゆゑ。却危〜とゆまるゆぞれとゆゑ義成主領ゑて。

其も理りある言ぶら那秋毎ふ小禽を捉る者を見よ。必ずへ友鳥の渡るべしと豫より相定めるふわるねども。媒鳥を生措くと云へ野の鳥早く其聲を聞て遥ス慕ひ来て掛る羽篭ふ黏ぬいるゝ。況戰場ふ蒞む者ハ是存亡の境ハ然ば那城内の士卒いかゝ大将品ある者とゝ吉凶禍福を占問んとて必来々大角ぶ掛る囮の壹貫ト黏ふ掛る者あらでハ已ぬ汝ハ逆是ものゝ。思量り一所ゆきゝんを尚危しとく阜下ハ多ハ才ふ誇られ萬一の小心ふて。あらむぞとめと解れて毛野ハ額を働く。御注疏の至當至妙る又亶ハ云へ。もゝ。良むのゝふそゆへ就て大角ぶ揣る所既ふ分れ。ゆゝ。悄地ハ注進仕られ送り分せ。洲崎の快船ハ那地ゆ便宜の浦ふ留措く該ふ入へ。その船とゆゝ。上げて。然ば其生吾あらむ折智勇兼備らる一個の兵頭ふ逞兵百五六十名皆楫取の技ふ熟いるを從せゝ。悄地ふ那地へ遣しゆ大角よく敵を欺ゆ。

○文淺堂藏

なりとも。又是ものの邦助をければ分ひぐゝ。一所あり。といへば義成主又領ハく。開も亦我よくそろゝ。其折大角の邦助ふ。兵頭ハ堀内雑魚太郎貞住を宜しう。他ハ量裏ふ貞分ふ從ふく。千代丸圖書助豊俊並ふ真里谷武田を征伐の折ゆと尤ハ戰功あり。然れども其武勇ふ誇らゆ。都て貞分の指揮ふ據りく。せざるとゝ。ゆと。他ハ上總ふ所要ありて。推津の城ふ在留ふれども。その恩劇を。ゆ知りて。必急ぐ。ゆ。ゆ。其見参の折悄地ふ命せん。然りとも人ふ望あるゝと。向れて毛野又答るゆ。那堀内貞住のゝ。も臣ゆ。偽ゆふ。ハ。ども。実ふ一人當千の勇士ゆるゝハ豫知る所ゝ其御撰擇ふ。優ゆ者ハ。ハ。義成主今ハ。ゝ。就て亦一説あり。素藤ぶ逆徒ゝ。那千代丸豊俊ハ量裏ふ貞分直元ぶ生拘ふ。あけ。折我思ふ。ハ。ぶ儘那身を貞分ふ関け置ゝれば。今も猶囮中ふ在ゝ。ふ豊俊先非を悔て。則管貞分父子ふ就て。只管ふ恩赦を願ハ。

其情願の趣は這回の役に従ふ〻今まで死刑を寛容の德澤に報ふ所死をも
せまく欲をとい〻の弐昨日貞行が信乃道節荘介小文吾現人神に消息し〻く
貞住今上總に在れば告訴甚不便人和殿も宜く守え上げく執成を憑むと云
さてとそ〻をもて五大士者は昨日衆議の席に先六郎と兵庫助に商量し〻く
則我に告げかゞる卒介に赦免の制度に及ぶ汝の弐を何と思ふと問れて毛
野は狄が堪ぬ悄地に答禀さもう臣若ら隊計る所の其一條はあくまで既に
禀上げし如く敵地へ向者に遣せる者〻大師大角のまそは猶足らざるうれへ今
一人伴りて敵に降参する者を作り直し〻事を行はゞ十二分とらるべし其降
人は真里谷氏狄然らぬ又千代丸氏狄開は孰れ一旦罪を被りて館を怨を
もつるべし情由ある者はひとべ敵に信容せられざるべし然れども真里谷信昭主は前朝
病死の時えより千代丸氏は罪重く久し〻く囹圄に籠措るに真実歸服の心な

くは饒して使せのゆべくもあらぬ〻ふせもと思難て言ふ生さぞいひ〻に那人館の御
仁政を深くも感じ〻なれば今番の役に従ふて命を涯に德澤に答もらんを
願ひ禀さは是則御盛德の致を所ふ〻いそ那罪を恩免ありて敵方へ降人は
一役に使せゆべ臣若ら悄地に那人は計畧を授け彼はせて敵の衆艦を燒せ〻ら
弐をいそ〻ぬ〻りと請焉れば義成主は然之々と又點頭て那豊俊が逆心は初
衍心く素藤が為に永人に做りと羞且那友ら罪免れ〻と思ひけん真里
谷信昭武田信隆ら俱に一旦鹿城を〻るを根柢ありける謀叛に且數
世榎本の城主ら〻と〻く我其刑戮をいそ〻ぶ〻ら〻ふ時ありて他も亦先非を悔ひ罪を
謝して恩赦を願ふに虛狄実狄汝藏人が宿所に勸問ていろ〻実情を〻ら
我必他が罪を饒さん用ひて呉の黄蓋が故轍を踏せよ敵を謨り泛て功あら其
賞として榎本の城地を返し與ふべし。その弐を堀内藏人に告て豊俊に示し

と言叮嚀に仰れば毛野いとく悦び兼てヨク心ゑた御仁政の上やいなだ但し件の御使を臣も一個奉らんと外に人もなげかはしい義兄弟の内誰にも又一人を添させの豊俊愈美服して計策に従ひと稟し給へ他よりもヨク敵方へ悄地に遣せ使ひの千代丸が甚吾臣の宅養へと佯りて音音曳る単節などを相応しくいべけれ他も是女流なれども武蔵の水邊に生育へたる今戦世の俗習に舟の上の棹さよ自由をなるらと豫少なる勇婦毎ふいへ必成まるいん然れども其密使を遣せに只今は尚早なり敵の這方へ艦を找る一両日前そよられ事急なる折に思ひけるに鈍びれいく敵に思慮ある者といても必や信容れく疑ふ暇なるべし。信れいそぶいへども先音音もを召とせもとて臣も倶に悄やふ負ふ許遣はゞ音音も則豊俊に對面まべし迄に面を吾ぐいくも後に事を謀る折に不便にそなるあと言遣もるく請に毎に義成主諾ひく。その

義も我ゝくなるなり。遊莫音音もを召まるに是密策の上なるに物々もく有司に下知あて。瀧田へ遣さべるにあるもの義汝も消息して召て且那婦人もなげ来る折俱にて藏人許赴らば人怪むとなるべし既に那地に入る。大角あれ事大緊に成るべなる又千代丸豊俊を使はく欲まるに事十二分に謀なるて。と思ふ必勝の用心精密宜に脱落るに所なしと稱へのべ毛野がなる。畏も兼る目今の御意のなぐに只愚意の致に所にヨクなる敵の戰艦を焼く。御方の間者に一隊をうんと帮助あるに如とる。非如大角が那地に謀る可夏成るとも只其一方のこゆくい。煙を免るに敵ヨクなるべし。風に那王をりく。這里ゆくも起に易なる火術に敵の後より必做まべる事なれば心許なくいなに。一旦叛さまるに。図圄の中に月を歴へる千代丸氏もに偽る時御用に達べる秋びあり。況豫知に召る。河鯉の政木大全及石亀次郎太郎三郎に今這息劇を人偽ふ。

知るよしもなく左右川の底の水屑ふちなる狭口に這二子のミなを。又那落鮎有
種に道節毛野が復讐を。幇助しよりの洩ぬえよりも。定正主に憎れて。那身危
かりければ。穂北の荘を自焼して。悄地に宅眷を携へ。御黨と共侶に。往方も知ぞ
なりけるとは。鄙に依介が忠告ゆゑ。臣名は夙く少知りぬ。君も亦間諜兒の注進
ゆゑ。知り召れしなるべし。公に有種。其凶変を臣名八名に告知して。當家に住を
願まつる。那五十子の討るゝを待ずして。立去りしを羞る狡進退。勇なるに似ずと
ども。力を揣らで戰殺して。御黨さへ多く殺さば。開口匹夫の勇のみ。必是真
勇のせざる所なるべし。其一事をもて。論ずかたなし。義士毎にそは。その中に有種は。
一霎時日陰に立ぬまでぞ。命に恙なくは。紛れもあらぬにぞ。慰る由はなし。大全
次圖太名の存亡のミ。又今ゆくに料難し。是さへあるに親兵衛が。信今に守え
ぬを。義兄弟名と共侶に。歎ぬのミ。禀性く。御聆に入るゝに反て益なれ。女々

しき詩言にしへ。言に出さぬひしに千代九氏の。ゆふよりて。坐に嗟嘆に堪ざれば。その
義に及びぬれとも。又歎ぜれば。義成主に然て。そとなり。心く倶に惆然さう
なるを。うち紛らゝ嘆く。夜よ毛野。然まぞに痛くる歎ぬ。八個の賢士を。
るもう我薄德に過ぎれば。又開げ上に忠孝義勇を。大全餘之七名を添
ざるに造化の小兒の配剤ゆく。涯なるべし。と悟りく我身を省れば。歎ぬもう。
歎くもう。と思ふに什麼。と慰めゆくに。毛野に畏く額を衝て。御諚感佩仕る遮
莫御盛德に比れば臣名のミゆく足るべくもいなぞ。天縁実に盡ぬもあらば。死せりと
思ひ孝嗣名の程經て参り仕る日の足あるべし。欲料りくかり。開い左まれ右もあ
ま千代九氏の一義のへ。音音名と召さゆべ。當要をいそぎ。ふと義成主又
然と応て。開も密策に縁るゆゑ前ゆも既にしりぞく。佐と有司に命まべくに其
進退に左も右も。汝名に任用せ。信乃道節荘介名。約莫五名の義兄弟に

汝我這旨を傳へ。粥よく隨意相計ひて。昨宵よりの疲労もあらん先退りい
へよく。權且暇を賜ひぶ毛野い稍退ぞく。頃日當城内を賜り。僑居の耳房ふ
かつ多つ。則信乃道節莊介小文吾現八を奥の閑室ふ喚集へて。昨宵、大
と大角を。悄地ふ武藏の柴濱へ遣ーける事の顛末。又千代丸豊俊の事ふ就て。
毛野が筌壽策あるよりと音音曳る單節弓を使ふぞ。あれ先當城へ召よ
もべぞ意味い恁々。是ふよそ。舘の仰留樣々と言送もるく耳ぞ生れ。五大
士い皆相歡び。事の便宜を商量を當下道節がふやう。大阪い旦足我黨第一
番の智囊ぞれい。然だろの計較い做ー易かるべぞ多ぐら。却大角い思ふ倍く。
、大師をよく説果ーける。其言を今具ふ伝くふ蘇秦張儀を学ぎて妙る。
宜ふ感心々々と誉れい莊介點頭く。然え那人い詞寡くく。いべ必當るとあ
ア。這温順兒ふ。ぞれい。敵地ふ造りく。憶ぎも馬脚を露を失あるむ。开を擇出

せ。大阪の多配りも亦妙る哉と。俱ふ稱く已ざれい。現八も亦ふ。そう犬村い壁
返ゆ。山貓を對治ーて。親の怨を復ーー後いいまぐ目覺ーぞ。禪ぞを石ぞ。
のく人大々ふい只文学礼讓の人とのみ思ふもヨヌろう。然るを這回い大戰大殺義
兄弟ふ拔萃て。必や花やる多。武勇の挙動あるんぞるむ。とふを小文吾推林ぞ。
那芙い、大師へ犬村へ必成を事ゆるぞや。其頭の批評い且閣て當要を音
音の媼弓を召來てぞ。一芙ふそ。とのそぐを信乃い諾ゆ。然え开を秘事を。
且舘の仰もあるふ只消息を亦閒ゆる。奴隷使をのくぞ。所詮甲乙とらんよ
ア。犬田和殿と咱弓と。這御使を奉りく。今より瀧田へ赴ぞく。老舘の御安否を
伺ひ。且那媼弓ふ秘策を示ーて。俱ーく明日夙かつ来てん。といへ小文吾小
ア。と答ふ毛野もの説を好と。応く。両兄那里へ玉ぞ。事の捷徑ふの上る。前
月水陸の人馬調煉以来久ーく老舘ふ見参ぞ。便是一事両用へ宜く

計ひゆひねとく。且労ひ且急せば道節は壯介現八も。倶ふあの説ふ従ひて犬塚犬田が御用ゆく。今より瀧田へ赴くようと。両家老東荒川ふ告んとく。あの弐を毛野ふ相譚ふ程よ。信乃小文吾ハ遽しく。身壯衣しゆ。伴當を倶して瀧田へ赴けり。小程ふ。犬塚信乃犬田小文吾ハ連ふ路次をいそぎしも。程近くなれば辛くして。その日晡時の左側ふ瀧田の城へかゝる。其宿所へ立ち寄らで。隨即義実主の隱館ふ参上りく。躯て當番の近習小湊目。韓舩貝六郎ふ就く。恁々と守え上げ。ゆ。義実主欣びて。そゞ儘召よせて對面ある。却宣ふ。前月煉兵の事あるよりも。久しく汝ふと見ざりしふ亦憶ひも。ふ。軍事起りく。愈疎濶ふ。ゆるのゆる。恙もあるぞと。芽出たく守くふ。這回ハ八州の両管領ふ敵ふせられて。數萬の大兵水陸より。推寄せ来べしと。ふ風聲あり。その弐ハ曩ふ安房殿義成より。杉倉武者助をして告られて。其大略を守知りく。其事愈実ふ。欣と問きく信乃先

答ふ。ゆう。豫敵地ふひし。當家の間諜の兵毎ゆ立登り入代り。注進漸々ふ其事守えく。ゆも防戰の御准備あり。とハ小文吾語を續ぐく。敵の大軍遠ゆ曩ふ推寄来べしと。守えし一條ハ事極めて実ふく。紛れあるべきもなぞ。遊莫館の御雄武なく。一戰を遂ゆゆ。數萬の大敵恙ゆく。舩を返ふ稀ゆべと。慰め宣ふを義実主ハ。うち呼ゆ合笑ゆ。否と。勝負ハ人の時運ふあり。前ゆりして必と思ひ決むべふあり。彩ども幸ゆして我子ハ思ゆゆむ。且世ゆの羽翼あり。て毛野ハ軍師の任ふ當り。又汝ゆ。ゆ。ふ。ハ防御使ふて敵と俟べし。と制度せられ。とハ。ゆ。ふ。家叔日と我成ふ渡来より以来浮世の事ふ懇念ゆ。隱逸者ゆ在ゆられ。佞折ゆも安然ゆゆ。ゆ。ふ。樂も欲りせず。軍旅の事ふ耳振立て見ふ守くべゆハ思ひども。但大江親兵衛ゆ。竟ふあの期ふ遇ざハ遂ゆ憾ゆ涯りゆ。然ども天道ハ。盈るを虧く又盈ゆむ。他ハ程歴ゆ還るとも恙ゆハ何ゆあらん。今ゆふ又思ゆ。盈

る。汝等ハ夜と云く日と云く軍談ふ暇あらざるべしよ。恁両個うち連立て我を訪る故
のやうと同れて二大士感謝ふ堪ず姑且て信乃が答るやう最辱し御懇命臣等が
かゝり来ふけるハ然ばくるゆふいなぞ。館ふも野ふ薦ゆまろ〻計策ハ其式ふ就て立音音
等ふ御用ある臣等ハ其御使を奉りく。よし折を窺そのへ先尊體の御安否を伺ひ奉
る次為ふ拜見を願ひまろふ次といへば義実主黙頭て。開ハ亦要あるゑんふ被留ハ
ず心よ似ゆ那音音等ハ媳婦まで今わかへる代四郎の信を待托て果敢ゆるを
思ふゑんふ何等の所要ゆ知れども代四郎ふ代りて一役わゝ本意ふ稱ん又妙真を
親兵衛をいふくと日毎ふ待ゆん是も亦不便ん汝等ハ宜く慰めよ夕陽ハ既ふ没ぬ。
退りく所要を果ねと只顧ふいそがゝ立のべ二大士ハ共侶ふ立ちく去り。左右ゆく退り
ず。又小文五ゞ答るやう否音音等ふ伝ふ次密談ハ友て暮るを好とも時尚早く
いへども明日ハ早天ふ他等を俱ゝ稲村へ参りのへ其折ハ舞ゝまろかゝりの式を

いゝぐ饒さをのへと請ふ。それを好々と応て猶もいそゞのへ信乃小文五ハ教びを享
まろ躰く退り出く。徑ふ姥雪の宿所ふ赴く程ふ點燭時候ふゆりふけり。衢ふ信乃
小文五ハ伴の奴隷を走らせて立日立日ふ恁と告ゝ立日立日ハ曳ゆ早ゝ即ち立ち
教びて共侶ふ猛くけゝ夕饌の儲ゆとる次客あり。妙真も早く知りて歩ゝ囲坐ふ
入相の鐘鎬々と响く時候常より早ゝ燈燭の花ハ散さゑ奥坐席極拂ひゆる
冬の日ふ開く稀の莘臥坐の布ゝ次ゆろさへ和ゝ次老女主人ハ故ふ執も漏さで老
実ふ隅々ゆ炭斗角火盤茶盆ふ添ゝ一對の茶碗ふ見ゆる錦ゆの錦ふあゝ次巻
物ハ殿主煎餅を消飲ふ執も具して待ゆ程ふ既ふく信乃小文五ハ歩ゝ伴當ふ
呼ハ門ゝ次ハ音音ハ躰く出迎へゝ先這方へと奥在さる儲の坐席ふ請ゆ曳ゆ
單ゝ即ハ火盤を薦め茶を看めて云云と他一句我一句迭の口誼言訖れば妙
真も音音ふ就て去の席ふ連りて信乃小文五ハ對面ゝ音音と俱ふふゝ

○天保元年

そも親兵衛代四郎が今番の役ふ立むるべき時の憾の安方るべを両館の憐まるひく。是より先ふひと早く照文ものを再度の使ふ京へ遣しあひけ。其歎びを諍復も感るいて涙果あるべし。信乃小文吾ハ慰めて。今も亦老館の御懇命。箇様々々と伝へ示しつ却伴當を皆宿所へ遣して。ロハ二犬士の。儲の夕饌を受るべも。其後信乃小文吾ハ音音ものを三人と妙真を。招聚へて告るやう。今日我们ぐが今来ものハ。但是軍談の密使ぞ。毛野が館ふ薦めもるべし。筮寿策あるふ。ようと箇様々々。如此々々の一毛と。千代九圖書助豊俊が先非を悔て死刑寛裕の報恩ふ。今番の役ふ立むるべく欲まで。連ふ赦免を願ふ事。あとをて毛野が計る所ハ豊俊ふ詭の計を行はせて。敵ふ降参を請むる折豊俊の使ものを自ものを立名を遣さるべ。あの毛ハ今明日の事ふあらぬ。敵の大軍推寄ものべ。一両日以前を好とも。ものれども刀自ものを豊俊と面善らぬ。那地ふ到りて。不使るべ。明日堀内貞行許遣して豊俊ふ對面させよとあ。館の御内意かくの如し。但一両個の幼息を推乃ものべ。時宜るるねば。妙真大母関と。權らひざると。且膝下ふ類ひあひ。あの毛ハ別ふ談ぶぶを。折もよくあふ在せば言少省れてと宜しと。小文吾是を説示せば。信乃ハ語を續ぶ足らざるを補ふ密談蕭もるけれ音音曳ふ單ぶ即ものハ額を点めもの果て。且然ぶ大るるるを頭を抬げて憶ぶも。吻と息つ。二犬士ふ向ひて共侶ふ答るもの。數るる及身の過分ぶ両館の御洪恩代四郎の。欺奴奴ものもで。御枝持の下ふ置せるを仰ぶもれば。瓠形の照る日ふ斧ものかぶ。其御恵ぶこのかひもるく。恁る折ものる代四郎ハ信もるかりも。ぶ孰の日ものを命を捨る。御恩ふ答まるやと思べ心焦燥ものるふ慨しかりふ幸ありて淡ぶ婦女子と大事の御用ふ立させるハ一期の歓びるの上や伝るぶ。ぶガ二尺八寸ものを乳を離れて獨遊をるぶれ朝夕とても易かりて。憚りるるる。妙真姨御宜く憑まるると云ロ誼斧ぶ媳婦丘母答雄雄ものく勇ものを。信乃小文吾ハ歓び感して。猶云云と談まるふ妙真応もせず涙吃ぶ

信乃小文吾ふうち向ひく怨むるを嘗犬田主犬塚主言憚りなく仍れども非如錦の御内意まれ思ひ返さるる御計ひ犬阪主も恨ーくは代四郎叟の富山以来親兵衛ふ就てた両館の御恩を喜ぶれ我孫とくふ来あるれど親兵衛は最早御身達ふ先ぶ立て両館ふ見参の初より尚總角なる年歳ふ優て素藤を征伐ふ正く二度の大功あり其後又路遥る京師へ使を奉ーく目今家ふ在ぶとも敵へ間者ふ遣さる然る大事の密使ふ婦女子で宜ーかるむふ憚りなく奴家をこそ犬阪主の薦め喜ーて用ひさるをひるが異日親兵衛がかへりても面伏なる一役ハ侍れ舩の上の技ハも舩長の母さけ奴家ふ太の刀自達がいかゆる及ぶ発肉身なる故依介もう往る日敵地の光景ふ注進ふ参りーとの今番の御用ふ達はるふ奴家単身安閑と宿所ふ在りて人の稚児を衛ーて旦ー暮されんや依怙も見ス屓も事ふ在そとふ情ふ無ふ せんと恨み切なる氣を怒て憶ぎとくと泣沈めば驚れはる信乃小文吾噫聲高ーと推

鎮めて信乃が先諭もう燒御の怨言寔ふ以ある理なるふあるねども犬阪が薦ふ喜ぶ這老弱三個の婦人を敵地へ間者ふ做さるも亦是以ある事ぞか并を甚麽ぞと音音の媼ハ器械含ぶ男子ふ勝る本事あるの毛ハ上毛なる荒茅山ぞ犬田も咱ぶも目擬るもう漫ふ物ぶ少く妥言るふあるぶ又鬼ふ単ん郎両嬶婦ハ年尚少くて且顔色醜ぶ盆敵の士卒なる者誰ふ色を好ざるべ然が豊俊が敵降参ぶ密使と伴りて這色をりて事を謀らば敵の士卒凝ぶ相欺ぶ信容れん。ふの毛を犬阪が思ふをの胡意れ身を用ひざるけ意味を悟ぶ恨ふ解ぶ小文吾も亦ふ単竟ふ止るも館の御為を思ひまるぶ私の一義をもく役不足をのべるもらぶ枉く意見ふ従ひ人と諭ぶ音音曳ふ単節も共侶ふ慰めて盡を誠の言の葉かさ涙の露の玉稜ハ除れても輾ーがふ妙真才ふ目を拭ひて小文吾ふ我身の不肖を恨るより外ハ侍らねども親兵衛が人ふ先ぶ立たる功を思ーなれるが切そもの人數ふ加へく敵所へ

いねとある。御詠を写さん。今あの仮ふ息絶て身は死るぞ死ねと。後ふ写さん親兵衛。亘伏るぞ思へ。花は昔の老樹の悲。ゆ町人の後家町人の母ぞ。身は大刀抜く術を知らねばそれ佞る時役ふ立ぬ生甲斐なし。既ふ覚期を究めぬる。切ふ恥を知る者そ。とかく親兵衛ふ伝へ給ひ。然らば。とかく身を起して。外面投て出るぞ。小文吾慌て被居て理を辨へても有験ふ老女。今ゆ短慮に似げなし。と叱るごく宥れば信乃も殆困果て。妙真を寛解てらせ。姨御。然もそふ思ひ給ふ。俱ふ稲村へ行て。又大阪へと商量せば。御身の隨意做そ。もしもゆえ必ず性起りなんそ。噛犬田姨の心一筋なるも忠信節義の故ぞれば。理なりとのたまひ給へり。和殿の主張甚麼ぞ。と問へば小文吾然ばよの仮ゆくゆく果しもあらず。俱ふ稲村へ行てもん。然るとたれば姨雪の穉子ぞを。平何いせん。とふそうち多く音音と曳る。単節も俱ふ欲びて。我れ二人御用ふ立ても姨の憾を送れる。快くぞけらんふ。そもそも又本意あるものふるん。力二尺八寸留守者る。炊妾ふ任用せるべ。左も右

も。とく却あるべ。非如泣くとも莫やとも。飢て死るぞい幸るん。と惴れば信乃も頭を掉く。不吾とよ母さへ大母さへ宿所ふ在て。穉子ぞの。留守ふ置るが人怪むべ。佞れば両個の穉子ぞも。親達俱して。稲村へ行ね那里ふ造りて彼ゆえんとふ。一議ぞ。昼く果しるが。音音曳る。単節ぞが欲びけ。之。歎ぞを轉してうち笑れ。妙真い貌を改める。信乃小文五吾ふ謝してふ。思ひ。ふ。刀称们ふ心詞を盡さく。小夜の深るも知らざりしふ。一筋なる老女の愚ふ。人を恨を。身を托しふ他ふ譲らじと思ひ。忠義の誠心ぞ。けるを。猜しく。彼よく相計ひる。好意ふ。よりて面を起を。欲び奴家のこるぞ。親兵衛ぐ異月かの。本意を。ふの義を写ば本意と。稱ん。佞るべとふ。知ざり。腹立詞の仇ぞを。傷痛く思られけん。許しゆとうち勸解れ。信乃ふ笑々。黙頭く。その欲び唆ぞも同前。勸解らく中をえや。却唆ぞふ犬田と俱ふ明日ふ早天ふ稲村へ行て参らん。姨ふ姨雪の母子五名と。各轎子ふ乗ち賀りて。背より續ぞく。稲村へ詣来ゆ。轎子を用るふ外親を歎ふ

所以ぞ。その美い我々の伴當を。分ちく両三名殘し置くべ。他們を俱していそだゆ。
とゐへ小文吾も俱ゐゐゐ。脚小の出ゐゐ年少けれども老ゐも身粧ゐ時の移る昔稲
村い程近くゐ。日景ゐ短ゐ時候ゐれい。今宵より准備をいそだゆと期と推せ。妙真音
音曳ゐ單節ゐ。皆共伴ゐ庵をゐ。又茶を煮てゐ薦めけゐ。そゐ中ゐ力二尺八を。
暮ゐと躯く臥房ゐ入りく。早く熟睡をゐ。這客ゐを知ざりけゐ。既ゐて
信乃小文吾い。妙真音音ゐゐ辭し別れて。頃日姑且疎くけゐ。當城の宿所ゐかゐ来。
共伴ゐの夜を明をゐ留守をゐ。隷僕あれい。皆飲びてよく仕へけゐ。慈而次の日。信乃小文
吾い早天ゐ稲村へ赴く程ゐ。妙真及音音曳ゐ單節い。力二尺八を推ゐ。那伴當の
央ゐ。四箇の轎子ゐうち駕くく。俱ゐ稲村へいそだけゐ。抑這一對四個の義姑節婦
ゐ。悄地ゐ軍役ゐ用ひられく。後の話説甚麽ぞ。开い下回ゐ解分ると聽ねかし。

南總里見八犬傳卷之五十二終